

沼津市

# 明治史料館通信

2004.7.25 (季刊 年4回発行) Vol. 20 No. 2 通巻第78号



『響』昭和12年7月号表紙 [当館蔵]

ぬまづ近代史点描 ⑤8

## 沼津いろは歌留多

『響』は昭和九年に創刊され、戦前期に沼津で発行されていたと推測される雑誌である。編集・発行は杉山嘉一。当館で昭和十一年十一月号(第三巻第十号)と昭和十二年七月号(第五巻第六号)を所蔵している。前者の表紙は誌名のみであるが、後者では「郷土中心 文化雑誌」と副題が付されている。文化雑誌と銘打っているも

の、収録されている文は、文芸雑誌のような詩歌などではなく、沼津に関する時事記事や批評などが寄せられている。全体的に風刺的な雰囲気にあふれており、偏った視点ではあるが、当時の沼津の様子的一端を伝えるものといえる。ここでは、第五巻第六号に収録されている「沼津いろは歌留多」と題した一文を紹介する。

沼津いろは歌留多  
 いーいつも沼津にや金がない  
 ろー論より証拠、予算面  
 はー花が咲いても浮かれない  
 にー人間ばかりが殖えてゆく  
 ほーほつたまんまの沼津港  
 へー扁桃腺炎の子供が多い  
 とーとても市長にや歯が立たぬ  
 ちー築港なんどはいつの事  
 りー理屈はあつても云はぬ市議  
 ぬー糠に釘打つ市会の質問  
 るー留守役の助役が眠くなり  
 をー女は多いが女工さん  
 わー僅か五万の田舎都市  
 かー観光事業も身がいらす  
 よー酔らせて議案は無事通過  
 たーたごの宴会、いつも満員  
 れー歴代市長の悩む学校  
 そー粗末な市庁舎、壁が落ち  
 つー月に影浮く香貫山  
 ねー眠る商人現状維持  
 なー泣く子と市長にや勝てませぬ  
 らーラツパ吹くのが豆腐屋さん  
 むー無理な課税も泣き寝入り  
 うーうるさい御婦人が多過ぎる  
 ゐー居ながら富士の四季を見る  
 のー呑気に暮すにやよい沼津  
 おーお役所仕事はスローモー

くーくやしかつたら市議になれ  
 やーやり繰世帯の市の予算  
 まー街にネオンがちらほらと  
 けー県に内所で準備教育  
 ふー冬は年中西の風  
 こー小金あるならおいでなさい  
 えー駅は貧相な木骨建  
 てー鉄道員が幅を利かす  
 あー後はどうでもまづ借款  
 さーサイレン遠くへ聞えない  
 きー気候がよいのでんびりして  
 ゆー雪のつもらぬ冬が多い  
 めー免除させ度い授業料  
 みー三島に劣る繁栄さ  
 しー自慢ならぬ高い税金  
 ゑー海老で鯛釣る人種あり  
 ひーひとの葬儀に飲め唄へ  
 もー元は海辺の草つばら  
 せー千本浜には松の風  
 すー住めば都と諦める



権田勝之助か  
 [権田新一氏寄贈]

当時は支那事変勃発の直前とい  
 う時期で、沼津市長は前年一月に  
 返り咲いた森田泰次郎氏。前年  
 は沼津観光協会が設立され、二  
 年には御成橋が架け替えられ、七  
 月一日に渡初め式が挙行されてい  
 る。

黒船来航という外圧によって日  
 本の近代が始まったとすれば、ま  
 さにその黒船を自ら造り動かすこ  
 とができる力を身に付けた時、初  
 めて日本人は自立への自信を獲得  
 したのでないだろうか。幕府で  
 も薩摩藩でも軍制の近代化は海軍  
 建設から開始されたのである。

沼津兵学校は陸軍の学校であつ  
 たが、教授陣には赤松則良をはじ  
 め幕府海軍出身者が少なくなく、  
 彼らの影響を受けた生徒の中には  
 海軍の重要さを認識した者もいた  
 であろう。それは旧幕臣一般に対  
 しても言えることであり、海軍の  
 機関科に限ってみても、沼津・静  
 岡・掛川等移住の旧幕臣子弟には、

## シリーズ 沼津兵学校とその人材 海軍のエンジニア

### 権田正三郎

宮原二郎(機関中将)・山本安次郎  
 (同前)・永嶺謙光(機関少将)ら、  
 活躍した人材が少なくなく、明治  
 海軍を支えた指導的エンジニアの  
 相当な部分を徳川の遺臣たちが占  
 めたことがわかる。ここに紹介す  
 る権田正三郎も、廃校後海軍兵学  
 寮に進んだ沼津兵学校資業生出身  
 者であり、明治海軍の機関科に足  
 跡を残した技術者である。

権田家は、代々徳川家に仕えた  
 幕臣であり、過去帳には九左衛門  
 (正徳三年没)、弥五兵衛(宝永七  
 年没)、金五郎(享保一二年没)、  
 政之助(享保一九年没)、甚蔵(寛  
 政一〇年没、藤蔵(寛政一二年没)、  
 佐市郎(文化一二年没、佐太郎(文  
 化一四年没、半次郎(文政六年没  
 )といった先祖が記載されている。  
 チョンマゲ・帯刀姿で写真に写っ  
 ているのは、明治三九年(一九〇  
 六)に八十二歳で亡くなった勝之  
 助(酔睡)であろう。

正三郎は勝之助の養子だったと

思われる。沼津兵学校資業生には  
 明治三年(一八七〇)九月に及第  
 し第六期生となったが、当時の名  
 簿には杉田正三郎とある。勝之助  
 の妻は、たぶん養子の顔を知らな  
 いまま、明治三年十月に亡くなつ  
 た。実は、勝之助は小普請池永織  
 三郎の子であり、権田家は二代続  
 いての養子であった。勝之助の甥  
 池永静治は、精鋭隊―新番組―開  
 墾方に所属し、遠州金谷原に入植  
 していた。権田家は、勝之助より  
 も数代前から池永家とは姻戚関係  
 にあつたが、表火之番などをつと  
 めた池永家の家格を勘案すると、  
 同等の御家人だったと推測される。  
 なお、正三郎の実家杉田家につい  
 ては不明である。

さて、正三郎は三年一二月他の  
 資業生五名とともに大阪兵学寮へ  
 の貢進生に選拔され、新政府の陸  
 軍士官への道が開かれた。しかし、  
 理由は不明であるが、実際には彼  
 一人だけ入学しなかった。その代  
 り、廃藩・廃校まで沼津で勉学を  
 続けたのであろうか。そして、今  
 度は藩の命令ではなく自らの意志  
 で海軍士官への道を選択する。



権田正三郎か  
[権田新一氏寄贈]

五年（一八七二）五月、最後まで残っていた資業生六三名は陸軍教導団に編入されたが、正三郎はその中には含まれなかった。そして、同年九月二日、全国から集った海軍兵学校入学生六三名の一人に選ばれたのである。沼津兵学校資業生出身の向山慎吉・中山訥、同附属小学校生徒出身の安原金次・永嶺謙光らもいっしょだった。教官の側にも、山本淑儀・荒川重平・並木元節ら沼津兵学校の恩師・先輩がいた。しかし、翌六年七月にはイギリスから海軍教師団が到着し、制度が一新され本場仕込みの教育が開始される。一〇月、生徒は運用砲術科・測量科・蒸汽機関科に分けられ、正三郎は蒸汽機関科生徒（三六名）となり、機関長サットン、副機関士ギツシング、同ハーディングの指導を受けることになった。七年（一八七四）五

月、機関科は分校として築地から横須賀に移転、造船所での実地教育が行われる。八年一〇月九日には機関科生徒一四名が卒業、機関士補に任命された。イギリス式の整備された教育制度に則った最初の海軍機関科士官の誕生である。正三郎はその一人であった。一四年（一八八一）時点では中機関士（中尉相当）に進んでいる。同級生や同僚には外国留学に派遣される者がいたが、正三郎は国内で勉学を続け、東京大学理学部機械工学科に進み、一七年（一八八四）一〇月二五日卒業、理学士の学位を得た。一八年イギリスで建造された巡洋艦浪速の回航員に大機関士として加わり、副長山本権兵衛大尉らの下、日本人による初めての回航に従事した。その後、正三郎は、長浦水雷營に在勤、二一年（一八八八）九月には海軍大学校教官となる。さらに海軍機関学校教官兼部長技術会議員などを歴任し、二三年（一八九〇）一月には天城機関長となつた。三〇年（一八九七）一二月機関少監（機関少佐）に進み、三

二年（一八九九）一〇月後備に編入された。日清・日露の実戦には参加しなかったようだ。

正三郎が、養父の後を追うように亡くなったのは、明治三九年二月七日だった。特旨により従五位に叙せられた。生年がわからなため、没年齢は不明だが、沼津兵学校当時一〇代後半だったと仮定すれば、五〇代のはずである。

沼津城下旧幕臣割付図（明治六年頃）や「日枝神社氏子帳」（九年）には、西条町に正三郎の名前がある。本人は別として、家族は廃藩後もしばらく沼津に住んでいたのだろう。明治二三年時点の住所は東京麻布区となっている。

正三郎の公務以外の活動については、旧幕臣子弟の奨学のため明治一八年（一八八五）に結成された静岡育英会の設立発起人に名を連ねた事実が知られる。

〔参考文献〕『帝国海軍機関史』上巻（一九七五年、原書房）、『帝国海軍教育史』第一巻（一九八三年、原書房）、『牧之原開拓士族名簿』（一九八七年、金谷郷土史研究会）

（樋口雄彦）

## お知らせ欄

### ◎「四方教育史文庫」の設置

当館の名付け親ともいえる四方一弥氏は、長年の研究成果を『中学校教則大綱』の基礎的研究』（梓出版社 二〇〇四年）という大著に纏められました。その土壌である氏の蔵書の一部を当館に御寄贈いただきました。当館では「四方教育史文庫」を設置し、保存・活用していくこととしました。

「文庫」には、日本の近代教育史に関係する貴重な書籍・資料が数多く含まれています。特に都道府県等によって編まれた「教育史」はほぼ揃っています。日本近代教育の先駆けともいわれる「沼津兵学校」を、研究・展示の一つの柱としている当館にとって、ふさわしい「文庫」であると考えています。

「文庫」は閲覧ができます。一階図書室に目録を配架してありますので、閲覧をご希望の方は受付までお申し出下さい。複写も可能です。

◎企画展の開催

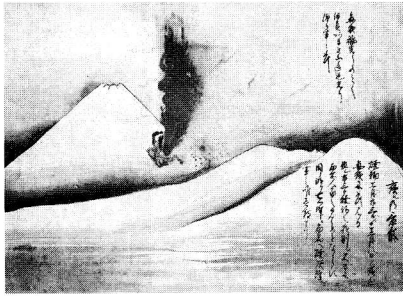
開館20周年特別展・平成16年度  
第1回企画展として「天地鳴動―  
沼津と噴火・地震・津波―」を開  
催しています。

昨今、「東海地震」の危機が間近  
に迫っているとされています。  
今回の企画展では、過去沼津を襲  
った噴火・地震・津波災害の資料  
と、「東海地震」と防災について紹  
介しています。

期間：7月24日(土)～9月26日(日)  
会場：当館3階北側展示室

※江原素六に関する展示は、  
期間中規模を縮小して展示  
します。

図録：展示解説書として図録を刊  
行しました。頒価五〇〇円



「夜ル乃景気」[土屋博氏所蔵]  
宝永の富士山噴火の様子が描かれています。

◎歴史講演会の開催

企画展に関連して歴史講演会を  
開催します。多数の御参加をお待  
ちしています。

講師：小山真人氏（静岡大学教  
育学部教授・火山学）  
演題：「沼津が揺れた時―噴火・  
地震・津波災害史―」

日時：9月4日(土)14時～16時  
会場：当館2階講座室  
定員：100名、参加費無料  
申込：7月28日(水)9時から  
当館まで電話で

◎夏休み企画の紹介

◆高校生のための1日学芸員体験  
講座

「学芸員」を体験しよう。  
日時：8月10日(火)10時～15時  
対象：市内在住、在学の高校生

定員：20名（先着順）  
参加費：無料、昼食持参  
申込：7月28日(水)9時から  
当館まで電話で

◆平和を考える親子戦争史跡めぐ  
り

市内に残る戦争関連の史跡を見  
学します。親子で「平和」につい  
て考えてみませんか。

日時：8月11日(水)9時～4時  
(雨天中止)

対象：小中学生とその保護者  
定員：10組20名（先着順）  
参加費：無料、昼食持参  
申込：7月28日(水)9時から  
当館まで電話で

◆史料館を探検しよう  
クイズに答えながら、史料館を  
探検しよう。史料館の裏側まで見  
られるかも。

日時：8月4日(水)、7日(土)、  
20日(金)、24日(火)  
各日：9時30分～11時  
対象：市内の小学4年生～中学  
3年生  
定員：各日5名程度  
参加費：無料  
申込：各開催日の3日前まで当  
館まで直接または電話で

◎8月21日は無料開館日  
静岡県民の日8月21日(土)は無料  
で開館します。

◎古文書解読入門講座の開催  
はじめて古文書に接する方を対  
象に、初心者向け講座（全5回）  
を開催します。

日程：9月5日、12日、19日、

26日、10月3日の各日曜日  
時間：14時～16時

講師：武田藤男（前当館嘱託）  
会場：当館2階講座室  
定員：40名（先着順）  
参加料：無料（辞書代は別）  
申込：8月10日(火)9時から  
当館まで電話で

◎燻蒸実施のため休館します。  
大切な資料を虫やカビなどの害  
から守るため、館内の燻蒸作業を  
行いますので、通常の月末休館日  
を含め以下の日程で休館します。  
あらかじめ御了承ください。

休館日：10月25日(月)～29日(金)  
◎沼津市博物館紀要28の刊行  
体裁：B5版、146ページ  
頒価：五〇〇円  
内容：樋口雄彦「林洞海筆『茶農  
漫録』の総目次と紹介」

沼津市明治史料館通信 第78号

編集 沼津市明治史料館  
発行 沼津市明治史料館  
〒410-0051 沼津市西熊堂三七二―一  
電話：〇五五―九二二三―三三五  
FAX：〇五五―九二二五―三〇一八  
http://www.city.numazu.shizuoka.  
jp/sisetu/meiji/index.htm